

# TOKONAME

## This and That

②

SEPTEMBER 2015

TAKE FREE



第二号  
とこなめ、あれこれ。

SPECIAL INTERVIEW;  
POTTERS in TOKONAME  
Akira Koie, Pek Nyonsu  
EVENT;  
TOU-TO-TOU NO HI  
JOURNAL;  
My Favorite TOKONAME  
ART in the Street  
TIMETRIP

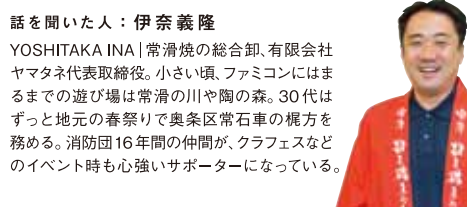
常滑で暮らし、陶と向き合う人。

EVENT:TOU-TO-TOU NO HI

WHO IS CHOZABURO INA?

### 故・伊奈長三郎って どんな人?

「陶と灯の日」だけでなく、常滑にいて伊奈長三郎氏の名前をあちこちで耳にします。命日が街をあげてのイベントに発展するなんてよほどのこと。地元の人にとってどのような存在なのか話を聞きました。



やきもの街、常滑の礎を築いた方が伊奈長三郎さんです。昭和29年に、大野町や鬼崎町などと合併し常滑市になったんですが、いろいろな原案が出ていたところ、「ここは常滑焼の街だから常滑市に」という長三郎さんの一言で決まったといいます。普通なら読みづらい「常滑」をあえて市の名前にしたのは、それだけやきものへの思い入れが強かったんでしょうね。常滑市になったことで、一地方のやきものだった常滑焼の名前が、広く親しまれるようになったのかもしれない。

長三郎さんの人柄を伝えるエピソードとして、市長時代の給料は一切使わず引き出しにしまっておいて、市長を辞める際に「市の為に使ってくれ」とすべて渡したという話が伝わっています。自分のことより人のこと、という思いが強い方だったんだと思います。そういう姿勢は今も継承されていて、常滑焼まつりの協賛花火の締めとなる超特大スターマンは、ずっと、INAXさんと決まっています。もう逝き去られて35年になり、伝説の人物になりつつありますが、地元の人にとっては忘れてはならない大切な人。常滑の春祭りは毎年、山車の通るコースが変わるのですが、日曜のメインの時間には必ず長三郎さんの家の前を通り、お神楽をあげますからね。そういったことも、我々の感謝の気持ちの表れではないでしょうか。「陶と灯の日」のために、小学校で陶製のランプシェードを作るんですが、そこで長三郎さんの説明もしていただいていると思います。こうして子どもたちにも長三郎さんの功績を伝えていきたいですね。



### 編集後記

常滑に赴任しこの10月で丸3年となりました。3年前と今の常滑を比べてみますと、めんたいパーク、コストコ、常滑市民病院、そしてこの冬にはイオン常滑と新しい施設が次々と出来上がり、愛知県の話題を大いに賑わしています。常滑の人たちはこの変化という進化をどう思っているのかとても興味があります。このお盆の常滑焼まつりに顔を出した時に地元の陶芸作家の方が常滑のTシャツを着て笑顔で沢山のお客様を接客されている姿を見て、とても常滑愛を感じました。新しい物が次々と出てくる中で、常滑の魅力を保ちたいという力が若い人たちからベテランまで一体になっている場面でした。「まーえーがや！」なんていう言葉も会場でもよく聞かれます。このお盆も常滑ならではの思い出です。そんな常滑、人もお店も街もとてもお盆で私は大好きです。

[TOKONAME CRAFT FESTA サブリーダー (INAX ライブミュージアム館長) 住宮和夫]

### INAXライブミュージアム

■灯の海 17:00-21:00

INAXライブミュージアム どんご広場 「つながり」をテーマに人と地域と伝統を次世代へつなぐメッセージを紙コップに書いていただき、どんご広場に500個並べランプシェードにしてロウソクを点灯します。



■LED1500個の照明 18:00-21:00

INAXライブミュージアム 窯のある広場 6月に鬼崎北小学校4年生68名のみなさんが制作した照明器具を披露し、LED照明で点灯します。また、常滑の陶芸作家や職人が作った陶製シェードでいろいろな灯りが楽しめます。

■点灯式典・保示区お隣子 点灯式典 18:00 / お隣子 18:10-18:40

INAXライブミュージアム 窯のある広場 点灯式典において保示区のお隣子とからくりを披露します。

■交流会 19:00-20:00(受付18:45~) INAXライブミュージアム テラコッタパーク

やきもの関係者や市民の方など、自由にご参加いただけます。参加費:1名1,000円(軽食・ドリンク付(当日受付にて集金)) 事前申込可 TEL 0569-34-3200  
○知多半島ケーブルネットワーク(株)制作のDVD上映 ○ラヒラスリによるハンドベル演奏

とこなめ中央商店街・大落川 陶と灯の日で撮影した写真をとこなめ中央商店街(常盤蔵)と常滑図書館で展示します。

■「灯籠の川」・市民参加の灯火ロード 18:00-21:00

小学生や市民の皆さんが制作した紙製灯籠(200個)に灯りをつけ、大落川に浮かべます。常滑陶形会により制作された記念碑や小学生が制作した灯りの作品を商店街の道路脇に設置し灯りを点灯します。今年は新しく「灯(あかり)の場」が登場します。市民の皆さんと一緒に作る場をお楽しみに。

■名鉄常滑駅前ロータリー

■駅前ロータリー記念碑に灯りを点灯 18:00-21:00

常滑陶形会により制作された記念碑及びLED照明に点灯します。(平成28年1月末まで)

■セラモール

■陶と陶の日 10月10日(土)・11日(日) 10:00-15:00

常滑焼の鉢に絵付け体験ができます。植木鉢で人形を作ったり、自分で絵付けをした鉢に花を植えたりして、常滑焼もつとを身近に感じてみませんか。参加費:花植え500円、人形づくり1,000円 ※各日それぞれ先着20名ずつ

とこなめ陶の森(資料館・陶芸研究所)

■ワークショップで陶と灯の日(陶芸研究所)

10月10日(土)「自分だけの灯を作ろう!」

■6回開催:所要時間20分(予定) ■参加費:300円 ■参加対象:子供から大人まで

事前申込・当日申込可(但し、事前申込優先です) TEL0569-34-3200

10月11日(日)「七輪陶芸でMyコップを作ろう!」

■3回開催:所要時間3時間(予定) ■参加費:子供500円・大人1,000円 ■参加対象:小学生4年生~中学生3年生とその親(子供のみ参加も可) 事前申込のみ TEL0569-35-3970

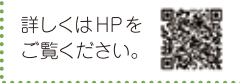
■オープン工房(陶芸研究所) 10月10日(土)・11日(日) 9:00-17:00

普段は公開していない研修工房内を見学できます。

■講演会「堀口捨己がみた建築における「常滑的なもの」(資料館)

10月10日(土) 15:00-16:30 講師:藤田崇(明治大学 准教授)

故伊奈長三郎氏から多大なる貢献により建築された陶芸研究所の設計者、堀口捨己氏についての講演会を開催します。参加費無料(但し、50名程度まで)



詳しくはHPをご覧ください。

伊奈長三郎氏の命日、10月10日を「陶と灯の日」としました。



伊奈製陶(株)創業者で、初代常滑市長及び常滑市名誉市民でもある故伊奈長三郎氏は常滑の陶業・陶芸の発展のため多額の寄付をされ、陶芸研究所や長三賞の運営などに生かされています。「陶と灯の日」は、常滑焼業界の歴史を振り返り、先人の陶業・陶芸における功績と偉業を再認識するとともに、新たな決意で常滑焼の伝統文化を次世代へ引き継いでいく原動力の一助となる事業です。





Akira Koie

人とやきものを育む歴史と風土。

どっしり頼もしい、渋く大きな焼き締め<sup>かめ</sup>の甕。  
 コロンと手に収まる、滑らかな土肌の朱泥の急須。  
 つるりと清潔、暮らしを支えるタイルや衛生陶器。  
 常滑のやきものは幅が広い。

個人作家のやきものにいたっては、さらに多種多様。  
 伝統にのっとりた急須を究める人もいれば、  
 オブジェさながら自由奔放な表現にまい進する人もいる。  
 技法も形も、バラエティ豊か。  
 それはつまり、たくさんの個性的な作り手が  
 常滑でのびのびと活躍しているということ。  
 実際に作り手と会って話す中で、  
 その層の厚みの向こうに、やきもの1,000年の歴史と、  
 港のもつ街のおおらかさが見えてきた。

Pek Nyonsu





## 陶芸からはじまる 1,000年の旅。

その人は天竺で  
1,000年の歴史を旅していた。  
と書くと、仏様や妖怪なんかが登場する  
壮大な空想物語が始まりそうだけれど、  
これは2015年初秋、  
常滑で会った、とある陶芸家のお話。

はじめて天竺と聞いたとき、作品か工房  
の名前かと思ったが、それは常滑インター  
のほど近く、幹線道路からちょっと入った  
ところにある、れっきとした地名だ。江戸  
時代の文書にもその名が記されているよ  
うだが、由来など詳細は知らない。ただ、  
何か物語の匂いを感じて、自然と期待が  
ふくらむのだった。

訪ねたのは鯉江明さんの作業場。うっ  
そうと茂る木々に埋もれそうなほったて小  
屋に入れば、店も人家も見えず、聞こえて  
くるのは風の音とカラスの声。虫はもちろ  
ん、蛇や狸も現れるこのワイルドな環境で、  
明さんはやきものを作るだけでなく、小屋

横にあるコンテナを寝床にして暮らしてい  
る。水道はないので、飲料水はペットボト  
ルに水道水を汲み、仕事用はすべて雨水  
を利用。電気はあるけど、ガスはない。「や  
、必要なときは何か燃やせば」。一瞬、意表  
を突かれたが、やきものを焼くときも、敷  
地にある穴窯に薪をくべて焚く明さんにと  
っては、何ら問題ではない。

常滑で生まれ育ち、父親も陶芸家という、  
やきものが身近すぎる環境のせいか、それ  
までまったくやきものに興味がなく、粘土  
で遊んだこともなかった明さんが、この世  
界に足を踏み入れたのは、2001年のこと。  
父親の窯づくりを手伝ったことがきっかけ  
だ。皆で一カ月半かけてつくる作業が楽しく  
て、この窯で焚きたい、と強烈に  
思ったのだとか。それが、はじめてのやきも  
との接点。「今も基本、窯を焚くためにつ  
くってます。僕、形を作ることに興味ない  
んです。やきものをやる全体の中での力配  
分としてはほぼゼロ」と明さんは言い放つ。

後で、ろくろ挽きの作業を見せていた  
だのだが、どってりした土の塊が見る見  
るうちに器の形を得る、その変貌の見事  
さは、これぞ陶芸という光景であり、実際、  
見惚れてしまうのだけれど、明さんはまっ  
たく興味がない、と。別に奇をてらうわけ

ないその言葉に、いちいち面食らってしまう。  
窯づくりの体験の後、やきものを生業  
とする決心をしたのは2004年、たまたま  
常滑で平安や鎌倉時代の古い窯を発掘  
するアルバイトをした際のこと。1,000年  
も前の陶片や窯に残る手の跡に触れ、昔  
の人たちが同じ地域でやきものを焼いて  
いたということを目の当たりにする。

「そういうことは本を見たら出てるんで  
すけど、自分も掘って作業をしている中で、  
ああ常滑でやきものができんだ、とそれ  
を知って。自分もこれを目指したいと、そ  
の長い歴史の中に自分が入ったら何が起  
きるのだろうって思ったんです」。

### 土が教科書、窯がノート

やきものを続ける中で、窯焚きだけでは  
なく土づくりもおもしろくなってきた。初め  
の頃は土を買っていたが、いつしか敷地内  
で掘るようになった。常滑の土なので、そ  
のままやきものの粘土になるし、そもそも、  
「その土が焼けるように焼ければいい」と  
いうのがスタンスだ。そして、掘り出したゴ  
テゴテの土を水に溶かすときの手触りな  
ど、仕込み作業の中で、「皿じゃなくて茶  
碗ぐらいがいいかなとか、窯のどこに入れ

て焼くかが決まってきます。逆に、ろくろを  
挽きはじめると制限が出てくるというか、  
仕込みで思っていたものができなかつた  
りすると、途中でやめて切り替えたり。土  
選びも表現だと思うんです」。

ひたすら土に向かい窯を焚き、やきも  
のを繰り返し繰り返し作り続ける日々。こ  
うして、誰かに弟子入りするわけでも、訓  
練校に通うでもなく、やきものの技術を  
体得していった。

「はじめの頃に本をもらったんですけど、  
専門用語ばかりで全然分からなくて。体  
以外では覚えてないですね。言ってみれば、  
土が教科書、窯がノート。焼け具合とか  
データを取りながら、そのうちに何となく  
分かってきたというか」。

拠点は常滑だが、ワークショップで招か  
れたり、湧き上がる探究心で、韓国や金沢  
にもたびたび足を運んでいる。行く先々で  
古い窯跡を探し当てたり、出土したやきも  
のを見たりしながら、歴史や伝来に思い  
を馳せる。「前に金沢で常滑とそっくりな  
甕を見たことがあって。一般的には常滑  
や瀬戸からやきものが北陸にも伝わった  
と言われているんですけど、モノを見ると  
明らかに技術が次第に伝わったという  
レベルではなく完成されていて、これは何

かあると思うんですね。須恵器も大阪から  
入って広がったという通説がありますが、  
それは教科書で話で、実際、大陸から海  
を渡ろうとすると、日本海側の方がラクで  
すし、北陸に直接伝わっていてもおかしく  
ない。また、北陸でつくるものが変わる時  
期があるんですけど、年表を見ると韓国の  
都が変わるタイミングと合うんですよ」。  
学者のように史実から読み取るのでは  
なく、モノからのアプローチ。通説と違っ  
ても、その声は力強い。

### 原始的なものと暮らし

明さんをこの世界に引き込み、今も突き  
動かす、1,000年前のやきものにどんな  
魅力があるのか。

「土との距離感…ですかね。それは作り  
手と土なのか、使う人となのかは分から  
ないけれど…」と少し考え、「土器と暮らし  
てことをしてみたいと思っているんです。陶  
磁器と違って土器だと水が漏らないよう  
な工夫をしなくてはならなかったりするの  
で、そうすれば、もっとそのあたりのこと  
が分かるんじゃないかと」。

土との距離感という深遠な世界観を  
すぐさま理解することはできないが、とりあ

えずこの原始的とも言える環境は、明さん  
にとってごく自然なのだろう。朝日が昇ると  
ともに土の仕込みを始め、基本、作業は明  
るうちに。天候に合わせて活動し、窯を焚  
くときも温度計ではなく煙の色を見て判断  
する。そうするうちに、どんどん五感や第六  
感を研ぎ澄ませたのか、「満月の日は明る  
すぎて眠れない」し、仏様や悟空は現れな  
い。「幽霊はときどき作業場にでる」らしい。

見た目はガッシリで髭面の、一見おおざ  
っぱな印象もあるけれど、感性はすごく繊  
細で鋭いかもしれない。だからこそ、1,000  
年前の陶片が持つ、当時の人と土との距離  
感に、何か目指すものを見つけたのだ。

実を言うと、5年ほど前、常滑の店で明  
さんのやきものに先に出会っていた。薄手  
ながら素直で健康的な形に惹かれ、焼き  
締めの小皿を買っていたのだ。家に帰り改  
めて、その渋くざらりとした土肌に自然釉  
の控えめな銀光沢を眺めつつ、手のひら  
に収まる器に込められた1,000年の時を  
思った。

鯉江明 AKIRA KOIE | 1978年、常滑生まれ。小さい頃  
はやきものには目もくれず、基地を作るなどして遊ぶ。  
名古屋の専門学校で保育士の資格を取るも、2001年の  
薪窯造りの体験を機に、やきもの世界へ。作品は、各  
地のギャラリーでそのほか、常滑では「To's Gallery (常滑市  
栄町3-88)」や「morina (常滑市栄町7-3)」などで販売中。

## 波の音を聞きながら、 自分で作り育てる暮らし。

大きく開けた空のもと。  
海まで徒歩1分、水平線には  
中部国際空港セントレアが浮かぶ。  
「夏は毎日、海辺に散歩してました」  
なんて、リゾートにいるような  
素敵な場所に、白年守さんの  
工房兼住居があった。

最初に目に飛び込んできたのは、青と  
白のストライプ模様が大胆に塗られた  
外壁。海風で傷んでいたために大家さん  
の許可を得て自ら塗ったらしいが、借家  
の壁を何て大胆な。手製のカラフルな  
タイルも加わって、明るく楽しげだ。中  
に入ると、ちょっとたれ目気味の笑顔が愛  
くるしい、1歳半になる息子の陸くんといっ  
しょに、白年守さんが朗らかに迎えて  
くれた。

もともと大阪で生まれ育ち、大学卒業  
後、信楽窯業技術研究所でろくろ挽きを  
学んだ白さん。滋賀県立陶芸の森に勤務

した後、知人の縁で、祖父母のルーツで  
ある韓国済州島で企画展の手伝いをした  
際に、常滑の陶芸家の吉川千香子さん  
に出会ったことがきっかけで、常滑へや  
ってきた。

千香子さんのもとで3年間アシスタント  
を務め、陶芸をはじめ日常を楽しみなが  
ら生活している千香子さんに刺激され、自  
分も陶芸で生計を立てていくことを決心。  
早朝や夜に自分の作品も作り腕を磨きな  
がら、アシスタント終了後に独立した。

それまで常滑とは縁もゆかりもなかつ  
たが、「海があるからか空港が近いからか、  
誰でもウェルカムみたいな感じがして、な  
じみやすいのが印象的でした。若い作家  
さんどうし教え合えるし、同年代の作家さ  
んも多かったの、いっしょにグループ展  
をやろうと声をかけてもらったり、活動が  
しやすかったですね」。

白さんのつくるやきものは、おっとり  
天然色の彼女の雰囲気さながら、やさしい  
色と不思議な模様が柔らかな雰囲気を  
持っている。この作風は常滑に来てから  
生まれたものだという。信楽にいるとき  
は、何が自分らしいのかとまだ模索して  
いたが、常滑でバリエーション豊かなや  
きものを見て、とらわれなくていいという



あまりに生い茂っているので、草刈り機  
を使うこともあるが、機械で刈ると弾丸を  
落とされたような何もない状態に、すごく  
癒しくなってしまうので、基本は必要な分  
だけ必要なときに手で刈るようになっている。



土の仕込作業。「粘土は蜂の巣づくりに  
びったりなんで、自分が作業する前に蜂  
が陣取ってたりするんですけど、お互い、  
先客がいるときは遠慮して邪魔しないの  
で、刺されたりはしないです」。



完成後にこの大胆なしま模様を見た大家  
さんは驚きつつも笑ってくれたとか。



# “TOKONAME This and That” JOURNAL

地元の人が語る、常滑の魅力あれこれ。

My Favorite TOKONAME

## My Favorite TOKONAME

#02

懐かしくて新しい空間・時間



GUIDE #02 岡田拓也

TAKUYA OKADA | イオンモール株式会社イオンモール常滑セラマルマネージャー。趣味は海釣りとかラオケ(サザンとエグザイルが好き)。イオンモールの開業準備で忙しい毎日だが、来春にはNTPマリーナりんくうで小型船舶2級を取得し、海を楽しもう予定。



「常滑は歩くたびに発見があります。空気が非日常というか映画のワンシーンにいるような気になりますし、昔を懐かしむ余裕が出てきた僕らの世代にとっては、小学生の時代を思い出させる昭和の雰囲気もいいですね」と語る岡田さんは、街歩きの後、「佐助」でホッと一息つくのが定番。昭和初期の建物を再生した落ち着いた空間に、常滑焼の器で飲むコーヒーの味わい深さ。そして、仕事仲間や奥様とゆったり語り合ったりひとり瞑想にふける時間。モノや人、時と静かに向き合える場所なのだ。「懐かしさを感じつつ、古くていいものに新しい感覚で出会える、常滑らしい所だと思います」。

この「常滑らしさ」は、この冬にオープンするイオンモール常滑の重要なキーワードでもある。「常滑の自然や文化が、施設の魅力になるんです。モノを売るだけではなく、常滑焼の実演や子どもたちの体験事業などのソフトも充実させるつもりです。開業にあたり多くの地元の方に会っていますが、常滑には人を受け入れてくれる豊かさがありますね。そういうおもてなしの心も取り入れながら、人がふれあう空間や時間をつくってきたいと思います」。

うどん甘味 佐助(わびすけ) | やきもの散歩道界隈にある、元やきもの工場を活かしたカフェ。器はすべて隣の工房で作られた常滑焼のものを使い、ドリンクに付いてきた菓子も隣のパン工房風舎のラスクと、この場所で作られたものが味わえる。土鍋カレーうどんや甘味が人気。  
常滑市栄町3-89 Tel 0569-34-7169  
11:00～17:00 火曜休

INTERVIEW with Pek Nyonsu

ことが分かった。それから積極的に展示会に足を運んだりして、多様な表現を見る中で、自分がつくりたいものが見えてきた。「模様を描くというか色をのせる作業が好きで、お皿をキャンパスに見立ててそこに色の世界をつくっていくことが楽しいですね」。

### 仕事も暮らしも、全部いっしょ

以前はやきもの散歩道の中にある古い民家を借りていたが、7年前にこの家へ引っ越してきた。元駄菓子屋だったところが土間床で工房にぴったりに上、海が近いのも気に入った。大家さんは独り身の白さんに貸すことを心配したが、やきものをやっている友人の「この人なら絶対、大丈夫!」という強い後押しで、借りられることに。「海が近くで開放的だし、穏やかな海を見てるとすごく落ち着くんですよ。ここに来る前、つらいことがあると海へ行って一人で海岸に寝転んだりしました。仕事のインスピレーションももらえたりしますね」。

その後、常滑に来てから知りあった人と結婚し、釣り好きの旦那さんも、海の前家が気に入って、実家を離れ常滑へ。陸く

んも海が好きで、靴を履かせると勝手に海に行ってしまうので、土間床の工房でも裸足で、部屋に上がる木製の階段か、近所のおばあちゃんにいただいた籐製の乳母車が定位置だ。

夏は毎日、朝夕と海へ。朝ごはんのあと、口の周りや手が汚れてしまった陸くんを裸にして、海で洗いつついっしょに遊び、遊び疲れたところに帰ってきて、お昼寝する陸くんを見ながら、白さんは仕事。お昼寝中以外でも、作業機の窓から見える広いウッドデッキで犬のくうちゅんと遊ばせたりしながら、やきものをつくる。

子育てをしながらの仕事。「やっぱりペースは落ちますけど、こうしてTシャツとか子ども向けのものをつくったり、陸くんが好きなお車をつくったり、そういうのはこの子の影響かな、と思います。もう少ししたら、粘土で遊べると思いますし、ゆくゆくは仕事のアシスタントをしてもらおうかな、なんて思ってます」。

産後3カ月ぐらいから仕事に復帰し、昨年の常滑クラフトフェスタには4〜5カ月頃の陸くんもいっしょに出展した。土日休みの旦那さんも手伝ってくれ、各地でのイベントに旅行がてら家族で出かけたりもする。仕事も子育ても家族の時間も、

全部いっしょ。「ワーク・ライフ・バランス」みたいな気張ったところは全くなく、同じ空間で自然とつながっている。絶対的に作業時間は限られてくるけれど、逆に陸くんが寝ている間の集中力ははんばないのだとか。

### 自分で作り育てる、確かな暮らし

海岸すぐのこの家は、常滑の市街地からちょっと離れているので、買い物なんかはちょっと不便。でも、「買いに行くのは遠いぶん最近ではパンも自分で作るんです。ま、つくったりするのが好きなんです」ね。自分で聞けば、話は別。畑もやっていて朝の散歩のついでに収穫をしたり、釣り好きの旦那さんがキスやハゼを釣ってきたり、なんて逆にうらやましくなってくる。INAXライブミュージアムのレストランで結婚パーティをしたときも、来てくれた友人に紙コップのランタンに絵を描いてもらったという。手間と時間はかかっても、その過程こそが充実しているように見える。

「将来的には自分のギャラリーを持ちながら、カフェをやって自分の器で出したいと思っています。やっぱり使ってみると良さがわかるじゃないですか。海沿い

のこの家が好きなので、やっぱりこの辺りで、カフェもできるような物件を探してらんです」。

はじめは、この海辺の環境がうらやましいと思ったけれど、この穏やかでやさしい時間は、白さんがつくりだしているものなのだろう。

白年守 PEK NYONSU | 大阪出身。滋賀県立信楽窯業技術研究所でろくろ挽きを学び、吉川千香子氏のアシスタントを経て、常滑の海の側の工房で作陶中。作品は各地のギャラリーのほか、常滑ではセラモール内「いそべ」(常滑市金山上砂原100)、やきもの散歩道内のカフェ「ni-no」(常滑市陶郷町1-1)などで販売中。岐阜市のギャラリー「元浜」(岐阜市西材木町41-2)にて2015年11月18日〜12月6日に個展を開催。その他、展示会の案内などはブログにて発信中。 <http://peknyonsu.jugem.jp/>

SPECIAL INTERVIEW: POTTERS in TOKONAME EVENT: TOU-TO-TOU NO.1



車好きの陸くんのために、やきものでつくった車のおもちゃ。第44回長三賞常滑陶展展入選し、「陶と灯の日」の協賛事業として、10月2日(金)〜12日(月・祝)の間、INAXライブミュージアムの土・どろんこ館に展示される。



⑤

ART in the Street

## 街角これもART #02



子どもの頃、神明社が遊び場で西側の森に入り、椿の花の蜜を吸ったり、実を笛にした思い出がある。陶製の狛犬の背にまたがって遊んだことも。

陶の街ならではの彫刻―神明社の狛犬



TSUKASA ISOMURA

文：磯村司  
TSUKASA ISOMURA | 常滑生まれ常滑育ちで、小さい頃の遊びは粘土細工。20年間の衛生陶器の製造経験を経て、INAXライブミュージアムのスタッフとなり、「光るどろだんご」づくりをはじめワークショップを担当する。趣味は街の散策のほか、美術館めぐりに、ヨット、お酒など。

## 時間旅行



DATE 1970年(大阪万博開催)  
LOCATION 常滑駅旧駅舎  
MEMORIES かつてこの街の「顔」だった常滑駅の旧駅舎。当時の常滑駅は、常滑線の終点であり始発駅。土管や縄を運ぶためにできた常滑線も2年前に100周年を迎え、家族と出かけた大阪万博も、常滑焼を売りに行く方も、みんな、この常滑駅から出発していきました。常滑に空港ができる遥か昔、海外に向かうにも、この駅から出発して電車に乗って羽田空港まで行っていたのも良き思い出です。

TRAVELLER #02  
常滑商工会議所 会頭  
牧野克則



KATSUNORI MAKINO

KATSUNORI MAKINO | 焼物の町で焼物向けの機械を作り始めて83年、株式会社マキノの代表取締役会長。100年後の常滑を見据え、地元経済の活性化に取り組み。文楽楽団の理事も務める趣味の音楽鑑賞は、カーペンターズに親しんだ大阪万博の当時から。

⑥

TIME TRIP